

● 森永砒素ミルク闘争二十年史

運動編

第一運動編章 守る会・光を求めて二十年

岡崎 幸子 森永ミルク中毒の子どもを守る会岡山北支部長
守る会・光を求めて二十年

(序―暗い夜明けに贈る) 毒を盛って人を殺せば死刑になる。これが世の常の道である。しかるに、罪なき百二十八の幼い魂を奪い、一万二千人の乳児を傷つけ、人類史にその例を絶する大毒殺事件を引き起こした森永乳業は、驚くなかれ、無罪になろうというのだ。

しかも今日、数百人のいたいな赤ちゃんが終生の不具者に還命づけられんとし、会社はこれを闇に葬らんとしている。

暗き夜には、政府も新聞も、医者も弁護士も、検察官も法廷も、こぞって大資本の前に叩頭するのかも知れない。

だが、歴史は欺かれないし、買収もされない。『我々が刀折れ矢尽きて斃れても、森永は永き世の末までも罪名を拭われない』と被災者は叫んだ。大資本の暴虐に泣く者の涙はもう私達の子が最後でありたいと念じ、永き世の人々が私達の運命を過去の悪夢と観ずる日の必らず来ることを信じつつ、私達の血を魂を捧げて歴史の審きに委ねんために、この書は綴られた。

―昭和三十二年八月二十四日の事件二周年に出版された「森永ミルク事件史」初版(再版は昭和四十八年八月十日、「砒素ミルクⅡ」として刊行された)の序文である。

被災者同盟が惨敗し、岡山同盟の一部の人は訴訟に走り、残され

た人達が止むに止まれぬ思いで「岡山県森永ミルク中毒の子どもを守る会」を結成したが、昭和三十一年六月二十四日であった。

被災者同盟と全国協議会の指導に当たった多くの役員が、失職の憂き目を見る中で、私の家業の小さな店も傾き、通院の必要な娘を抱えて生活に追われる最悪の事態が私達を見舞った。しかし、それにもかかわらず、憑かれたように事件史の筆を進める主人の姿は異様であった。

「事件史だけは絶対に書き残す必要がある。でないと、社会正義は全うされない」――そう言われると、私には返す言葉がなかった。

事件史がその数年後に、古書店の店頭で能瀬英太郎氏に買いとられ同氏が、守る会のこよなき支援者になられたこと。また、徳島検察庁から大量注文をうけて、刑事裁判無罪の判決を最終的にくつがえすに至った検察の努力に若干の貢献をしたこと。また、丸山報告までの十四年間に、約一千冊が全国各方面に配布されて、有識者の絶え間ない理解と関心を惹起する導火線となったこと。そして、丸山報告の時点で、マスコミのひっぱり尻になり、「砒素ミルクⅡ」において再刊され、今回の二十年史の刊行につながったこと。――一体、主人は、その時、歴史が今日に至ることを本当に信じ、見透し

ていたのだろうか？　しかし、事件史の序文は、明日の光明を信じる予言者のように記されていた。

昭和三十年五月十日、長女ゆり子出産、「異常ありません。キレイな赤ちゃんです。」看護婦さんの言葉に、始めて母親になった感激の涙を流した私は、丈夫なかしこい娘に育てたい一心で、定期検診には毎度いそいそと出向いた。母乳不足で、レーベンスや明治ミルクを飲ませていたが、保健所で森永ミルクが良いとすすめられそれに替えた。

暫く順調だったが一か月半頃から吐乳、下痢症状がでて、病院に通ったが、森永ミルクなら絶対心配ないと云われ、食欲の無くなつた娘に、薄めたり、濃くして量を少なくしたり、苦心惨胆して与えた。が次第に腹はふくれ、吐乳、下痢のくり返し、やせ、皮膚の各所が黒変、発熱、夜泣きで親子共々通院にヘトヘトになった。

七月下旬、四十度の高熱でひきつけが起き、日赤へ即刻入院。脳膜炎と診断され、絶望の三日目に熱が下がり、同じ様な患者が次々入院するのでベッドが足らぬからとすぐ退院を命ぜられた。脳膜炎の後遺症におびえる不安と悲しみの毎日であった。

八月二十四日、夕刊岡山で「ドライミルクの恐怖」の記事を見、二十五日各紙「森永ミルクのヒ素中毒」を發表、かけつけた日赤の前は、炎天の下乳児を抱いた母親の長蛇の列、混雑した小児科の診断結果は、「中毒症です。ベッドが足りぬから重症者の入院を優先し、市内の人は通院して下さい」といわれた。つい先日脳膜炎といわれ入院した事を訴えても通院せよの一点ばり。親達がささやく「砒素中毒解毒のバル注射を重症者は夜も打つぞうだ。バルは高価で毎日千円位かかる」等々、聞いた事を電話で報告し終らぬ内に、主人から、「砒素中毒は、石見銀山鉱毒と同じ重金属で、後遺症が残る心配がある。入院料も一切森永が負担して完全に治療すべき

だ。完全に治し、後に何も問題が残らぬようにすることは、むしろ森永にとってもよいことではないか。それには、親が団結してその様に事を運ばねばならん。安心して入院せよ。今、新聞に声明書を出すことと、署名運動の案をねっている。病院内の署名運動を頼む。通院せよと云われても絶対入院せよ。帰ってくるな。」といわれた。

私は、「署名は任して。お店を頼む。頑張って！」と電話を切ると通りがかつた看護婦に砒素中毒患者の病棟を聞き、娘と荷物をかかえ足の向くまま行きついたので二階二十七号室。手前の廊下から待合用の長椅子二本を引張り込み、ベッドを作りそのまま入院患者となった。混雑で通院患者とも知らぬ看護婦さんは、長椅子で気の毒だと布団を余分に運んで下さり、いつの間にかカルテも出来、注射も打って下さり、先生の回診も皆と同様であった。同室の方に「心配で勝手に入院した。よろしくお願いします。」と頼むと「よく来られた」と皆親切であった。

私は今になって思う。あの時医者の指示通り通院して充分な手当が受けられなかったら……と。現在被害者の中で当時の重症者が行き届いた治療で今は軽く、当時の中・軽症者の治療がずさんで後遺症の重い人がある。

主人の「強引に入院せよ。絶対帰るな！」の電話はすでにこの事件の本質を見通し、娘を重い後遺症から救ってくれた。私も娘も主人のこの一声に心から感謝している。

二十七号室には、高熱でうなされ、耳だれを流し、泣く力もない黒い赤ちゃん達が横たわり、バル注射の都度あえぐように泣き、その哀れさに親達は怒りを爆発させた。

「バルや抗生物質の注射で赤ん坊が完全に良くなるのか。家業は出来ぬし治療費は一体どうなるのか。森永は謝りにも来ないではないか」

私は西崎訂敬氏他数人の父母と夜を語り明かした。「被災者が団結して森永に責任をとらせよう。先ず日赤の入・通院患者の署名運動から始めるのだ」と夜明けに決意した私達は趣意書と署名簿の作製を主人に頼み、署名運動は私と二、三人でし、赤ちゃんは同室の母親が交替で看病する事に決めた。

主人が精魂こめて書いた人道主義の思想と要求で貫かれた「森永ドライミルクに依る被災家族中毒対策同盟趣意書」は、行政当局、県下の各大病院に宛て発送され、日赤の私達は重症棟の一階から二階三階へと走り、大講堂では、私はいつの間にか演壇の上に立っていたが、訴え終る間もなく親達は「賛成だ！」と叫び中年の夫人が「ここは引き受けた。頑張りましょう」と進み出た。

三階の廊下に我が子を入院させていた歯科医師の平田孝雄氏は「実は私も我慢出来ない気持ちでいたが趣意書を読んで感激し、決心した。徹底的に闘いましょう」と申し入れて来た。署名し乍ら親達は、毒ミルクと知らずにのませた怒りを、悲しみを、私にぶちまけた。

通院患者も我先きに署名、病院内はアツという間に団結した。私達は一般患者にも訴える為病院内に趣意書をはって回った。

「被災家族同盟結成さる」のニュースは新聞・ラジオを通じて翌日全国に報道された。

日赤の事務長は壁新聞をはられ同盟への電話連絡や客で迷惑だと文句を云って来たが「赤ん坊を救う為もっと協力してほしい」と抗議し、趣意書をはがされると夜に張り直し、夜更けの廊下を静かに走って廻った。看護婦さんは同情して見て見ぬ振りで、注射を打ちに来る度に激励してくれ、子供をよく看病して下さった。二十七号室は、各新聞記者・来訪者の出入りが繁く本部のようになったが、そこへ森永乳業岡山営業所の社員が私を尋ねて訪れ、ドアをあけて入るや同室の親達は「毒ミルクをのまして今頃何をしに来た。死に

そうな子供をどうしてくれる！」と叫び、おしめを丸めて投げつける人もいて、社員は驚きの余りろくに話もせずに逃げ帰った。

日赤を皮切りに大病院をはじめ各病院は次々と団結、総決起大会、同盟結成。主人が初代委員長となり、全国協議会の発足、北村雅俊氏・黒川克己氏等と共に交渉交渉と必死の活動に入った。

色素沈着等の症状も完全には消えぬ九月上旬に「バル注射も打つだけ打ったし重症者が次々入院を待っているから」の理由で強制退院を命ぜられた。長椅子のベッドから離れ、久し振りに帰った我が家と店は戸じまりがされ、うす暗かった。主人は被災者救済の同盟活動に飛び廻り、私は娘の通院に追われ、小さな化粧品店は「被災者同盟事務所」の看板がかかり、マスコミや被災者の出入りが多く「変な店」「アカの店」とイメージが変わり、お得意様からも見放され、努力の甲斐なくいつの間にか生活の支えを失っていた。主人は交渉・陳情・会議デモと飛び廻る他、事務局長としての文書活動でガリ切り、騰写版で莫大な印刷物の作成に、私もともに夜更けまで一枚一枚ザラ紙をめくってすり上げる闘いの毎日であった。

こうした必死の闘いも森永と厚生省と医者や権威者達の陰謀によって押しつぶされ、妥結案をもって同盟は解散。岡山の一部は訴訟に分かれ、解散反対の強硬派数人が、書類を強奪しに私宅へ押し入るといふ一件もあった。その後全国の被害者は散りぢりとなり、訴える場を失ってしまった。岡山の私達は、主人を中心に後遺症は必ず残るといふ確信を持ち、その解決を金を目当てとせず子供の健康管理の為に会社と交渉を続け、治療をかちとり、将来を見守り、親の責任を果たすため、昭和三十一年六月二十四日「岡山県森永ミルク中毒の子どもを守る会」を結成、会の本部を我が家に置いた。この日から守る会は、被災児の定期検診・治療・費用等について森永と交渉を続け、毎年八月二十四日には総会を開き親睦をはかり、活動し、子供の体を元に返すために努力をしようと誓い合って、小さ

な灯火をともし続けた。この年の七月一日には平和楼で中毒事件関係者懇親会を開いた。

八月二十四日は守る会第一回総会。岩月、吉房、浅野、上田、横田氏等は夫婦連れで、ミルクおしめの大荷物と、病気の子供をかかえて集まり、会場は超満員、病でむずかる赤ん坊が泣くのをあやし乍ら親達は、これからの子供の将来の為守る会を支え、頑張っべく事を何度も誓い合った。

聴診器を二・三度ポンポンと当て、腹を二・三回押えただけで「ハイ異常なし」と全決になった娘は、まだ額に色素沈着が残り元気がなく仲々立たずに寝ころんでいた。遅れて漸く歩き出し、皮膚もキレイになったが、こめかみの辺に小さな色素沈着を残したまま仲々消えない。女の子の将来にも影響する、何とか治してやりたいとたずねた大病院の小児科で、浜本教授は「今頃色素沈着が残った等と云って来る人は貴方だけだ。砒素中毒はみな治っておる。皮膚科廻しだ」。皮膚科では「生れつきのアザだ」と一蹴された私は森永と大病院のゆ着を肌で感じ、怒りと悲しみにふるえたものであった。

同盟解散と共に傾きかけた私の店は成り立たなくなり、パンと牛乳とバターであった朝食も子供を除いてはパンと水になった。主人は守る会の交渉に必要な文書作りでガリを切り、夜毎にペンを走らせ「森永ミルク事件史」を書いた。その後姿は無念と執念の固まりであった——事件史を書く事が闘いであった。私も事件史だけは残して欲しいと念じていたから生活の為に水商売で夜中まで立ち働くことも、保険の外交で歩くこともいとわなかった。

昭和三十二年八月二十四日事件史は刊行され、本を手にした時の感激は忘れられない。六月十八日に守る会は県衛生部に坐り込み要治療児全員の治療を森永に約束させ、八月二十四日守る会第二回定期総会。八月三十一日には守る会の交渉の結果かち得た検診を私は

倉敷中央病院で受け、岡大病院へ行くグループには主人や綱島氏等が付添った。主人は、会費のデータを常に文書にまとめ会社と交渉を重ね、治療費を出させたが、病気で入院治療をくり返す重症の子供達は苦しみの連続であった。

第三回定期総会・第四回定期総会には、綱島、岩月、吉房、上田、横田、浅野、の各氏らが集まり子供の日常生活・健康状態を報告、対策を練った。総会の日には会場である我が家のお床に掛軸の代りに、守る会のスローガン「森永よ、約束を守れ、誠意をもって後遺症患児を救え」「子供を元に返せ」の垂れ幕が張られた。

この頃は娘の体作りに一心になった。少々おくれたが正常に歩き出し、この機を逃さず体力をつける為子供の食事、栄養摂取に注意した。お八つも手作りで甘いものはさけた。年中風邪を引き気管支炎になるので体質改善の注射をつづけた。これだけではいけないと思い、朝夜は体中が真赤になるまで乾布マサツをした。この頃事情により現在の番町宅に移り主人は社会福祉協議会に勤務する身となった。動機は社協局長が森永ミルク事件史を読み感激、是非社協で活躍して欲しいと頼まれたからであった。私は新宅移転半年後に脳軟化で倒れた高齢の叔母を看病する立場となった。

娘には、体を鍛える為に主人と交代で行って旭川で泳がせ、秋風の立つ涼しい頃にも水の中に入れて体を鍛えた。保育園に通い出して明るい子になった。娘には、この頃から、砒素ミルクを飲んで赤ちゃんの時長く患ったから自分自身で自覚して鍛えるように教え込み、乾布マサツも自分で進んでするようになった。

娘には、我が家で聞かれる守る会の会合には、毎年参加させた。集まる親達や病気の重い子供達の悩みも聞かせ、森永ミルク事件を、親の活動を、自然に認識して行ってくれるようにした。

この頃森永本社の社員が守る会本部を訪れては、「砒素中毒患者はみな問題が無くなったのに、岡崎氏宅に集まる守る会会員だけは

後遺症があると訴える。思い過した。お嬢さんも立派に大きくなれた」等と世辞とも詭弁ともつかない言葉を弄しては後遺症をもみ消そうとしていた。また私宅だけでなく苦しみを訴える会員宅を訪問しては「先天性だ。他の患者はみな治っている」と砒素中毒抹殺に手を貸す御用医者と組んで説得につとめた。それ等の情報はみな会員の報告によって本部に集約された。

このようなやり方で昭和三十一年頃からマスコミは事件とは縁が切れ、被害者の苦しみは誰れにも知られなくなった。大病院の医師が先頭で後遺症は無いと宣伝する有様だった。その上岡山県衛生部は被害者を守らないで、森永の企業利益を守る方に力を入れた。

昭和三十五年一月十七日、守る会は臨時総会を開き、種々の情勢報告、活動の方針を討議した。そして、昭和三十五年五月七日岡山市都ホテルで森永代表磯部氏、松本氏と交渉して被害児の治療を行わせるべく約束させた。吉房亀子氏が子供の苦しみ、会社の不誠意を切々と、又机をたたいて訴え、森永社員が汗をふきふき答弁をする当時の写真が残っている。

その年の八月一日、岡山市立岡北中学で開かれた中国五県母親大会には、吉房、浅野両氏と私と三人で参加、子供の苦しむ現状、森永の不誠意を訴えた。

翌八月二日は守る会第五回総会。この総会の決定に基づいて、八月二十日、吉房氏夫妻、浅野氏、岩月氏等は、二十三日東京で開かれる第六回日本母親大会に出席して訴える為、また森永社長宅直訴、厚生大臣と面会、陳情、の大役を荷い、生米持参、野宿を覚悟で上京された。本部で行動計画を打ち合わせた時、上京する各氏は「子供の為なら東京駅に野宿しよう」と、生米かじろうと一向平気ですらあゝ。岡崎さんが居らなくても迷い子にやなりやあせん。行って来ますで」と親達は捨身の決意であった。出発後、主人は東京の知人「福祉新聞」の森鉄雄氏に上京組を頼むと電話連絡してお世話に

なった。森氏は当時広い東京で森永ミルク事件を理解されるたった一人の支援者であった。福祉新聞は守る会が母親大会で訴え、厚生省に陳情をした事、後遺症の訴え等を大きな記事にして報道した。

九月二十日、主人は十一頁に亘る、事件の歴史、検診データ、訴え等をタイプ印刷した。守る会発第二二五号の厚生大臣陳情書を作成、中山マサ厚生大臣に提出した。去る八月上京陳情の際、すぐ面会に応じ、親切に一時も話を聞いてくれ、記念写真までとった。中山厚生大臣からはその後陳情書について一片の回答も無かった。そして森永は、守る会の要求していた被害児の治療についての交渉を全面拒否して来た。(岡山県衛生部が秘密裏に、「被害者の苦情を適当に処理した」旨の報告書を厚生省に提出していたことが、後年判明した)

昭和三十六年一月十五日、守る会は臨時総会を開いた。出席者は岩月、吉房、浅野、綱島氏ら各夫妻と子供達、岡崎一家であった。苦しい上京をして母親大会に訴えても森永の圧力で世論は押えられ、厚生省は陳情に一言の回答もなく、権力の悪辣さに私達の怒りと悲しみは今後闘いを続ける決意をますます強くさせた。岩月氏はこぶしを握りしめ、

「わし等を田舎のどん百姓と思うて、厚生省や森永は馬鹿にしとるが、今に見ておれえ！ 恨みを晴らしてやるから。これから十年戦争でやるんじや、なあ岡崎さん！」吉房氏は、「そうじや。毒を入れたのは森永じゃけど、飲ましたのは私等やけん。一人前に元気になるまでは、親の責任を果した事にならん。頑張りましょうで！ 十年戦争絶対やりますで！」

それは森永の毒ミルクを知らずに飲ました親の悲痛な覚悟であった。娘が健康に育っていることに私は感謝した。それと共に立派に成人するのを見届けるまでは闘い抜くという皆の決意は、又私の決意でもあった。

訴えられるあらゆる所で訴えをつづける——というのが守る会の皆の決意であった。こうして、五月一日のメーデーには、県営グラウンドのメインスタンド二階に集合、守る会の旗をかかげ祭典に参加した。守る会の指導者は網島氏と主人とたった二人となり、活動に参加する会員は、極く少数の同じ顔ぶれであった。スタンドから見るかに見える岡山市街、山並み、青空の彼方の全国には、必ず多数の中毒児達が苦しんでいるに違いない。岡山守る会を知らないのだろうか？ 苦しみに負けて子供を救う活動をあきらめたのか？ 私達はスタンドで組織の無い為に苦しんでいるであろう子供達、親達の事に思いを馳せた。

そしてメーデー行進の中に入り、子供の手を引き、抱っこしながら団結のハチマキをしめて「子供を元に返せ」のプラカードをもって市巾を行進した。

また、十一月二日には、第九回子どもを守る文化会議に、岩月、吉房、網島の各氏と主人が参加、訴えを行なった。

昭和三十七年三月十七日は、守る会第六回総会。被害児達の小学校新入学祝賀会である。七年前には最重症の子供達ばかりだったが本部に寄りつどう親の子供達だけは、金にまどわされず、苦しい活動の中から得た治療のお陰で、皆人並みに小学校進学が出来た。前日に主人と私は、子供達の喜びそうな文房具のお祝いの贈物の用意をし、茶菓子もいつもよりはりこんだ。当日には、きれいにおすました子供達が親に手を引かれ喜んでやって来た。まだ病気の治療は必要だが兎に角苦しい入院を繰り返し、子も親と共に耐え努力したからこそ小学校へ行けるのだ。然し子供達の中には、歯の生えない子、皮膚の悪い子、眼の悪い子、まだまだこれからの闘病生活がある。総勢十七人、床の間を背景に主人が記念撮影し、一日を語り励まし合った。

昭和三十七年八月二十七日、守る会第七回総会の日、守る会の名

称から「岡山県」の文字を削り、以後全国単一組織として「森永ミルク中毒の子どもを守る会」と決定した。

主人が、「同じ苦しみを持つ者が、二人でも三人でも集まり語る事によって、一人で苦しみ絶望する事から救われる。そして生きる力と知恵が湧いてくる。どんな小さな組織でも、何一つ報われなくても、辛抱強く組織を守り、あきらめずに活動する。子供を救うのは、愛情から生れる闘いの力だけだ。私達は、岡山県の被害者だけでなく全国の被害者も共に闘うよう呼びかけよう。」と挨拶と提案をした。岩月氏は、「その通り。我々は裸で生れて来た。金も物も要らん。ただ子供を元に返してくればええのじゃ。全国だけじゃいけん。世界へ知らせにゃならん。極悪非人道の森永会社の毒ミルクを飲んだ子は、こんなに苦しんでるんですと！」とこぶしで畳を何度もたたき、汗を拭いた。私は、岩月氏の空になった湯呑み茶碗に何度も麦茶を入れ添えた。

十月、秋も終りの寒風の立つ頃、岩月、吉房、浅野、横田氏等は我が家に集まり、森永乳業岡山出張所前に座り込み、「森永よ！約束を守れ！砒素中毒の後遺症に誠意を示せ。」「子供の体を元に返せ」の一間の横幕を二枚張り、検診治療に誠意を示せの訴えのビラまきをした。あの大事件もすっかり忘れられ、経済高度成長時代のこの頃、訴えのビラまきは物珍らしく人を立ち止ませ、真剣に読んでくれたと四人は夕日の沈む頃本部へ帰って来た。

昭和三十六年十二月九日 脳軟化症で看病し続けた叔母が亡くなった。亡くなる二十日程前叔母は私に「ゆりちゃんも毒ミルクを飲んで貴方も大変だったろうけどあんなに大きくしっかり育って来た。この子の頭は大丈夫だよ。何時迄も心配しないでもう一人子供をお作り。私は一人娘を失って貴方方に随分お世話になって済まないと思ってる。貴方に子供を授かるよう祈っているよ。今度は男の子がいいね」といった。私は事件以来、後遺症におびえ生活の慌

しさに、子供を生む事に罪悪感と恐れすら感じていた。長い看病を果した事と叔母の残した言葉に心の安らぎを得た私は、翌年十月七年振りに長男を生んだ。長男の時はミルクに頼らず母乳を与えた。

昭和三十八年八月二十五日、第八回守る会総会には吉房氏が相変らず一番乗りでやって来た。総会では徳島の裁判判決がどう出るか何よりの関心事であった。然しこの頃は旧役員に呼びかけても返答なく、集会に参加する人もごくわずか、顔ぶれも決っていた。この年は岩月、吉房、浅野氏のみであった。集まる活動家の子供すらまだ齒科に内科にと苦しんでいるのに、他の多くの会員の子供等は一体どうしているのだろうか。あきらめて出て来ないのだろうか。どんなに育っているのかしらと心配し、心当たりの人を会へ連れて来る努力をしようと相談した。三氏は「守る会だけが私等の頼りじゃ。親類や云うてもヒソミルクの事は何もかも分かってもらえんからねえ。身内で云えん事でも岡崎さん方では安心して云える。この集会に来る時は何もかもほっとして来るんやけん。たった四人になっても会だけはつぶせん。岡崎さん頼みます」と三氏を乗せた「守る会丸」は主人を船長に、頼る島も無く掛声を出し合い海原をこいでいる姿であった。

昭和三十八年十月二十六日朝、朝日新聞第一面に森永無罪判決の大々的な記事を見た。徳島裁判所は、事件当時の徳島工場長と製造課長が業務上過失致死罪で起訴されていたのを無罪判決にしたのだ。主人は新聞を見るなり「無罪にしゃがったな！許せん！」とつぶやいたまま食事中記事を読み続けたが「これで岡山の民事訴訟も駄目だな。許せん」と又吐き捨てるように云って出勤した。私はそっと新聞を見た。「とうとう国の裁判も無罪か」とガックリ来た。夕刻勤務から帰った主人は、いつもなら賑やかな夕食時に一言もいわずに朝刊を読み返し、食事をすますとすぐさま机に向った。「お父さんどうするの？」と尋ねた私に「無罪は許せん！裁判長

に正しい現状を訴えるんだ」と云って複写用紙を取り出すと猛烈に書き出した。私は、同盟結成の時と少しも変らぬ主人を見た。また、それは大きな岩山にすべりながらよじ登る、か細い人影のようにも見えた。私はつい口に出した。「お父さん、国の裁判が無罪と決めた以上もうどうにもなりませんまい。昔の役員もちりぢり、誰一人協力してくれない。会員すら集まらない。世間は物好き、金日当てという中で貴方一人頑張ってみても、国と森永相手じゃ何程の事が出来るでしょう」と弱音を吐いた。

主人は、「今日までやって来て今更何を云う。だまって居れ。現に苦しんでいる子が多くいるではないか。森永ミルクの後遺症があるではないか。それに無罪。こんなバカな事があるか。あらゆる限りの訴えをし今迄のデータを出して裁判をやり直させるのだ。国家権力といえども、正しい事を正しいというたった一人の人間もいなくなれば、又第二次大戦時のような暗黒時代に舞い戻りだ。たった一人でも僕はやる。つべこべ云うな！」

一喝されて私は言葉無く苦しい戦時中と砒素ミルクの缶が頭よみがえった。執念と理想と信念に燃えた主人の横顔を見て、この人は死ぬまで砒素中毒事件を手放さないであろう、主人が正しいのだ。私は主人を助けて共に歩まねばならない。と自分を恥じ、かっ心に決めた。

翌三十九年四月二十三日、岡山の民事訴訟も全員取り下げた。示談金はたった三万円であったという。

昭和三十九年八月二十三日、第九回守る会総会に親子十四人が集まった。この頃、会社との交渉も一方的に拒否され、徳島裁判は無罪、岡山の訴訟は取り下げ、守る会の組織を守って活動しようとする意識のある者はほんの僅かとなった。守る会の暗闇のどん底時代であった。主人はこのような時こそ散りぢりになっている会員に呼びかけ、被害者の状態や親の気持ちを聞いて、守る会の今後の方針

を決める為、十周年記念集会を開こうと提案した。皆は、子供達も手伝い位は出来るようになったから家族総動員して助け合ってやってみようかと決議した。

昭和四十年に入って十周年集会の用意にかかった。守る会発足時の会員二百三十人に対しアンケートと開催通知状を發した。森永社員や県衛生部の出席も依頼した。

同年八月二十二日、岡山市春日町労働会館で守る会第十回総会、「砒素ミルク中毒十周年記念集会」を開いた。早朝より岡崎・岩月・吉房・浅野各夫妻は、被害児やその兄弟までをつれて来た。一家総動員で机、椅子を運び会場や受付を作り、スローガンを張り、湯茶の用意、資料配布と、十周年守る会で共に活動したこの四家族は、主人の差図で何をするにも意気投合よく動いたものだ。子供達は受付とお茶係りを引き受けよく手伝った。森永は、守る会が解散することを期待して解散記念品を持参し参加した。

定刻前より次々と入場して来る子供達の姿は、年齢より身長もずっと小さく、弱々しく曲った背骨、細い手足、うつろな眼、どす黒い皮膚、どの子も一様にいたまじかった。また、子供達の手を引く親達の淋しげな、あきらめた表情から察し、私は「これこそ九十年の歳月が作りあげた砒素ミルク後遺症の悲惨な集会だ。そして、守る会は絶対続くであろう」と思った。これらの姿は私に想像以上のショックを与えた。

親達は次々に我が子の異常を訴えた。南常子氏は「健康児と比較して調査してほしい」と発言され、皆が検診・治療を求めた。主人はこれらの要求を十周年記念集会決議と声明書にまとめ浅野氏が朗読した。集会が済み会員、森永社員等が私宅に落ち着いた時、森永の磯部課長が「解散になるというお話がまるで反対になってしまった」と頭をかかえたが私はお茶を進めながら「仕方ないですよ。会社が砒素をのまして十年も放とくんですから……子供の体は正直で

すよ。」と返したら皆無言になってしまった。

私達は、この集会に各マスコミが来ていたからどのように取り上げるか期待していた。NHKと中国新聞のみが後遺症の疑いをわずかに報道しただけで、反響もなく森永や県当局は集会の要求にも知らんぷりであった。痛ましい子供達はまたしても無視されてしまった。しかし主人は中国新聞のたった一つの記事を丁寧にスクラップし、スライド写真にも収めた。そしてまた、この集会結果を文書にして徳島検察庁や各方面に訴えた。

この年の秋、東京のジャーナリストの平沢正夫先生は著書「あざらしっ子」を出され、サリドマイド禍の子供達の苦しみを知った。そしてサリドマイド禍に全く関係の無い第三者の先生が正義の筆を振って立派な本を出して世に問われ、世論がサリドマイドの子に集中し、森永の子供達が見捨てられているのを、羨ましく悲しく思った。主人は今後は森永・サリドマイド等他の公害被害者団体が手を結んで行かねばならぬという考えをもっていたので、文書連絡をしたり、サリドマイドの中森怜悟氏をはじめ、他団体代表者が我が家に見えたり主人が出向いたりしていた。そして平沢正夫先生に「事件史」を送り、サリドマイド被害児と同じように森永ミルク中毒の子供がまだまだ苦しんでいる。「あざらしっ子」を書かれたように森永ミルク事件のことを書いて世に問うて頂き度いとお願ひした。

昭和四十一年三月三十一日、高松高等裁判所は徳島地裁の判決「森永無罪」を破棄、差し戻した。

この年の四月二十日には、会員の吉房亀子氏の御好意により家族中、作東町土居の吉房家へ招かれた。「岡崎さんに一度この空気の良い田舎の我家でのんびりしていただきたいと思っていた。わらび取りやよもぎつみをして下され。山羊乳の蒸しまんじゅうを食べ下され。たまには遊んで頭を休めて下され」と心暖まる款待を受けこのような同志の情で、団結をますます固めた。

この年の五・六月頃、あざらしっ子著者平沢正夫先生と松浦総三先生方が森永ミルク事件を取材に来られるとの連絡があった。見捨てられたミルク中毒の取材に東京の先生方がわざわざ岡山へ来て下さる。神様のお使いが来られたかの思いで先生方をお迎えし、夜更けまで森永被害児達の惨状を訴えた。先生方は精力的に各地に廻って取材され帰京された。主人は「『女性自身』に記事が出るらしいからたくさん買って置く積りだ」といい、私は楽しみに待ちこがれていた。記事は出なかった。理由は森永が雑誌社に広告料の圧力をかけたと後に聞かされ、事件圧殺の正体を見せつけられた。先生方も残念がられた事と思った。

昭和四十一年八月二十一日、守る会第十一回総会では昨年の十周年記念集会で守る会の活動を知り救いを求めて新会員が参加した。

新入会員は、守る会の治療活動で重症者が軽くなったのを知り、驚き、今まで一人で苦しみ続け、子供をかかえ悲痛な思いをした事を語り一緒に頑張りたいから頼むと申された。

主人は「過去十一年間守る会に集まった者はどんな困難にあってもおきらめなかった。お陰で重症の子も致命的な後遺症からは守られた。十周年記念集会の結果で会が今まで訴え行動して来た事が正しかったと証明された。これから新しい顔ぶれが増えたとし、どうしたら子供が救えるか積極的に考えてゆこう。」と皆を励ました。

岩月氏は「その通り、私は十年戦争を宣言したがアッと云う間に過ぎた。十周年の集会に来た子はどの子も可愛想なもんじゃ。こうなった以上もう絶対二十年戦争じゃ。森永よ思い知れ！ わし等百姓はくわ一丁、肥たご一丁あれば食うていくわい。銭はいらんぞな。子供の体を元に返してくれりゃあいいんだ。」といい、吉房夫人も「そうじゃ。この思いが通らねば死んでも死に切れんですぞな。」といった。

主人は「金も見栄もいらん。親の愛情ほど強いものはない。とに

かく世間は冷たいが、やる気のない森永や県当局は相手にせず、守る会独自で検診をする事を考えよう。」という、皆深くうなずき、行動する事があつたらすぐ知らせてくれと云って家路についた。「この世に本当に神様が居られるのなら、どうかこの人達を見捨てないで下さい。」私は祈る気持で皆の後姿を見送り会場の掃除をした。

さて、娘は、小さい時から水に親しませていたお陰で、水泳のクロールが得意で、小学校の高学年になってから、急に背が伸びた。専ら自分で自覚して体を鍛える子になっていた。私はエキスパンダーを与えて娘だけは母乳のよく出る乳房になる様胸の運動や乳房をもむことをさせた。今が最後の体作りの時と思ったから、お八つも甘い物をさけ専ら手作りのパンやおにぎりにのりを巻いて天ぶらを添えたり、たまに甘い物の時はその横に小魚を添えたりした。高級な甘いケーキ等買った事が無い。守る会の集会には一回も欠かさず参加させ、親の苦労話や重症の子達の苦しむ姿を見聞きさせて来た。

主人も私もこの事件については、すべての事を子供に話し聞かせ私は毒ミルクをのませた親の責任を果す為に闘かっている事を理解してもらった。そして守る会の役員の娘は、砒素ミルクを飲んだ事をかくしてお嫁にゆく事は出来ない、幸い軽くてここまで大きくなったのだからせめて自ら体を鍛え、勉強に励み、役立つ人間になるように教えた。娘も素直に教えを守り主人のかなり厳しい勉強指導にも耐え、小学校の卒業式には、卒業生総代に選ばれた。中学一年生になったとき、主人は著書「森永ミルク事件史」を娘に贈った。娘は一生懸命読んでいた。

その年十一月二十六日、遠迫克美先生や主人等が協力して結成された「葉害対策協議会」の創立総会が岡山県農業会館で開かれ、守る会会員も参加した。会長遠迫克美先生、講師大平昌彦岡大教授、

議長を主人が務めた。この会はサリドマイド児、森永ミルク中毒被害者の救済を主に活動した。南早百合ちゃんの亡きおじい様も熱心に訴えられた。又幼い娘達も受付を手伝い、サリドマイド児救済のバッジ売りをした。

会長の遠迫先生は熱心なクリスチャンで、被害児達を何とか救わねばと奔走され、昭和四十二年になって、守る会悲願の精密検診を水島協同病院で受けられるようにお世話くださった。協同病院では病院初の砒素中毒検診で、精密と時間を要するため土曜の午後から夜まで病院中が協力され、三月頃から九月末までに三回に分けて三十五名が受けた。費用も会員の窮状を配慮して、当時千円程の負担でして下さった。主人は病院と連絡を取りながら、会員を検診に行かせ、私も娘を連れて第二次検診に行った。実に十二年間医療から見捨てられた暗黒時代の、被害者の立場に立ったこの検診を私と娘は心から感謝の気持ちで受けた。検査室から検査室へ移動すること出入口で最敬礼をしたものである。

この検診結果が手に届いた時、主人は「これが森永砒素中毒の後遺症でなくてなんだというんだ」と吐き捨てるように云った。私も何回も見直した。皮膚・眼・耳・歯・肝臓・腎臓・知能・発育・骨・血液等にみな異常があり、一人の子供が必ず何か所かの病気を持っていた。可愛そうに何とかならないものかと主人と歯ガミした。内臓に異常なしは娘の外に一人、たった二人だけであった。この年の八月二十日の第十二回守る会総会では、検診の進行と健康管理の件を中心に、翌四十三年八月二十五日の第十三回守る会総会では完了した検診結果と今後の展望を中心に討議した。

「砒素中毒の後遺症については、毒をのんだ赤ん坊の時からずっと看病して来た私達母親の方が、大病院の森永御用医者よりよく知っているんだ。後遺症は無いなどと云って来た森永や、手先のやぶ医者者に水島協同病院の検診データを見せてやりたいわ」と、母親達は

くやしがあった。主人は「孤立している被害者が一人でも多く守る会へ参加するように努力すること。決してあきらめない事」を説いた。

昭和四十四年初夏の頃と思う。久しく音沙汰も無かった森永乳業本社の磯部氏が突然守る会本部の我が家を訪れた。簡単な挨拶だけして帰り私は何の為の訪問か意味がさっぱり分からなかった。今から思えば薬対協の動き、水島協同病院の守る会の精密検診、それに伴う協力医療陣や大阪大学衛生学教室の動きを知った森永が、守る会本部の内情をさぐりに来たのだろう。

昭和四十四年八月二十四日は守る会第十四回総会であった。この年も又新しい会員が参加した。中学二年になった被害者本人も参加した。そして各地に埋もれ苦しんでいる被害者の情報を交換した。

主人は「水島協同病院で守る会会員が受けた精密検診のデータが後遺症を裏付けるものであること。今日までの守る会の信条は正しく間違いなかったこと。それ故に岡山医大衛生学教室から協力の申し入れがあったし、大阪大学医学部の方にもそのような動きがある。守る会の十四年間の暗闇の闘いと、今まで空しかった努力は、近い将来決して無にはならないだろう。世の中の情勢は少しずつ変化している。金を目的とせず毒ミルクをのませた親の責任感と愛情から叫ばれた、子供を元に返せとの私達の叫びは全被害者の叫びとなつて爆発するだろう。その時こそ、岡山の守る会は全国の被害者の中心となり先頭に立って闘って行こう」と挨拶し激励した。

私は今迄に無く明るい期待に満ちた主人の言葉を、その時期到来はいつの事かと遠い夢を見るような思いで聞いた。然し一筋の希望が見えて来たのだ。皆は「機会が来たら必ず闘おう」と固く決意した。吉房氏は、「その時が来たら一番に知らせして下さい。岡山へ飛んで来る。子供の為に必らずやりますよ。岡崎さん頼みますよ。」と眼を光らせて云った。

十四年間の活動に対して森永と世間は守る会をゆすり、たかりの団体といい、又主人を、金目当ての気違いとか、物好き、アカ、等と云った。それは森永の守る会をつぶす為の世論作戦でもあった。時には警察まで窺いに来る事もあった。主人はこれらを無視し信念を曲げなかった。岩月祝一氏と吉房亀子氏は、十四年間集会には一回も欠かさず参加し、矢掛・津山の山奥からいつも一番乗りで出席した。私は集会の前日に会場を掃除し、茶菓子を用意して、皆の来るのを楽しみに待った。空しい努力が続き役員も散りぢり、会員もあきらめ切っていた守る会のどん底の頃の総会には、岩月祝一氏と吉房亀子氏・浅野幸子氏とわが家族のたった四・五人と云うみじめな年も続いたが、そんな時こそ少数の会員が心を合わせよく活動した。守る会の理念は主人の理念でもあった。報われぬ努力を続ける中で守る会という組織の力なくして森永や国を相手に闘い、子供を救うことは出来ないと言う事を、一人一人が自然に体得していた。

子供を救う為の、ただ一つの拠り所である守る会を何とか維持してゆこうと、捨身の努力をいとわず、暗闇の中に光を求めて十四年間、岡山で守る会の旗は守られ、ともし火はともし続けられた。

昭和四十四年十月十七日、朝日新聞大阪本社の新妻記者、為田記者から、森永ミルク事件に関する丸山報告「十四年目の訪問」（十四年前の森永砒素ミルク中毒の被害者はどうなっているかの訪問調査の結果）を発表するかどうか決定する為に全国で唯一つ組織活動をしている岡山の守る会を訪問、調査したい旨の電話が入った。朝日新聞本社が森永ミルク中毒事件を取材に来る!! 私には腰が落ち着かなかった。主人は、十四年間被害児の救済を訴え続けた闘いのことごとを整理保存して来た膨大な資料を引っ張り出し、黄色くなつた書類の山を一枚一枚めぐりながら活動の記録を説明、両記者も夜を徹して細かく調査した。両記者は、守る会の十四年間のたたかいと努力を認めたが今一つ後遺症の裏付けとなる臨床検診のデータ

があったらと申され、主人はさっと水島協同病院の検診データを見せた。それが丸山報告と余りにも合致するので、丸山報告になお一抹の不安をもっていた両記者も、遂に発表の肚をきめたようであった。

一方岡山県下の被害者の実態調査の為朝日新聞岡山支局員を動員して訪問するとの事で、主人は県下を東西南北に分け、東は南氏、西は国府氏、南は赤尾氏、北は吉房氏に電話連絡し、支局の記者が極秘のうちに取材に走った。新妻、為田両記者はすべての取材を済ませ、「守る会の、長い活動に敬意を表します。今後共頑張って下さい。」と挨拶を残して帰った。十四年振りの新聞記者の激励の一言は、今だに忘れられない。

十月十九日、朝日新聞の一面全体に亘って、丸山教授を中心とする「十四年目の訪問」（森永と素ミルク中毒事後調査の会で大阪の森永ミルク中毒患者六十八名の追跡調査を行い森永被害児はその後どうなっているかをまとめたもの）が発表された。主人は新聞を見るなり「遂に出たな! 日本最大の朝日を書いた。」と叫んだ。私は、「お父さん、おめでとう。良かったわね。」と云いながら思わず涙が溢れた。「めでたいかどうか、これからが大変な事になるぞ。覚悟を決めてかからねば!」という主人に中学二年の娘は、「お父さんが書いた森永ミルク事件史の序文の、『歴史は欺かれないー買収もされない。私達の血と魂とを捧げて歴史の審きに委ねん』はとうとう本当になった。十四年目に歴史の審きが始まるね。」と云って信頼に満ちた眼で父親を見た。

何も相談しなくても、親子がこれからの事態を受けて行く決意を持った。この時より私達は感激に浸り静かに語り合う時間さえ許されぬばかりか、食事も睡眠もままならぬような多忙な毎日が続くことになった。

一番に吉房さんが電話で、「岡崎さん。森永の事が出た。えらい

事になった。どうすればいい?」「とうとう灯火がもえ出した。これからよ! 待機していて。頑張らにやあ。」同志の思いは同じであった。主人は、朝日朝刊を数十部取り寄せた。事件以来最大の記事であった。

その後新聞を見た、新聞社に問い合わせた、テレビ局で尋ねた、又森永会社に聞いたと全国各地の被害者から問い合わせの電話が鳴り通した。主人は役所へ勤務する身故に、昼間は私が電話、来客の応待にと多忙をきわめた。

岡大医学部衛生学教室の青山英康助教授から、丸山教授と会見の準備をするとの事で、主人は勤務の後には衛生学教室へ打ち合わせに日参した。

三十日には岡山で開かれる日本公衆衛生学会に、丸山先生が『十四年目の訪問』を発表される。その前日の夜「丸山先生を囲む会」を岡崎宅で開催と決定した。私達のとってこまが増えた。会場を借りる余裕もないまま我が家の座敷でする事にしたが参加者が全部入れるかどうか問題であった。主人は各方面の連絡、議案の研究、声明文の作成、事件関係書類の整理、配布用資料作り、スライド映画の整備等々を片端からやっていた。

十月二十一日、勤務先で読売支局記者一時間、岡山新聞記者一時間、一時より週刊評論社松浦総三先生(四十一年頃平沢正夫先生と共に事件取材に來られた)が一時間と、目のまわる多忙であった。主人は帰宅してからも夜、松浦先生が宅に見えて事件に付いて詳しく説明したり、九時から二時までかかって緊急総会決議文案の草稿を練るといふ具合であった。二十二日、吉房亀子氏が來られ種々打ち合わせその夜座敷の会場準備にかかる。二十三日、主人は役所が引けると、ヤスリ、鉄筆、原紙を買って帰宅。夕方より夜明け三時まで声明書決議文等のガリ切り。二十四日午後、福井市の米田弥右門氏が來訪。砒素ミルク重症児をかかえて苦しんだ十数年を聞いて

欲しいと語られ、是非守る会に入りたいと夜更けまで話した。

二十五日の夜も二時まで「丸山先生を囲む会」の資料作成に多忙。二十六日、日曜は九時よりNHK橋本記者が取材、主人と二人で昼まで応待。午後から『囲む会』の会場準備で座敷の家具を運び出し大掃除をする。夕方、被災者同盟の時共に開かった北村雅俊氏より十四年振りに電話あり。午後七時半、朝日新聞大阪本社の為田、新妻記者來訪、午前零時まで取材。その間に午後十時にサンケイ、毎日記者が來訪、主人と私は二部屋に別れて各新聞社の応接。その夜NHKテレビが全国放送をする。

二十七日、朝七時、NHKテレビニュースを録音・撮影。主人は役所へ出勤。留守宅へ全国各新聞社から問い合わせがしきり、買物にも行けず、洗濯も出来ない。止むなく主人の勤務先の方へもかけてもらう。夜主人は、『囲む会』の準備。私は、座布団や湯のみの用意。毎日新聞の佐竹記者が來訪、午前零時過ぎまで取材。

二十八日、この日も朝から新聞社、雑誌社の問い合わせしきり。止むなく主人の職場に電話をまわす。勤務が済み岡山医大で丸山教授と会見して帰る主人を待つ新聞記者が二人一時間も待つ。帰宅後、食事もそこそこに対応。私は明日の会場の受付を知人の大西文子氏に頼み、受付、会場、来賓席等の表示紙やスローガンの筆書きをし声明文のテープ吹込み練習をする。声明文は守る会の孤独な十四年間の闘いを経て、この日を迎える私達の思いを主人が心魂こめて書いた感動的なものであった。私は読む程に胸が熱くなり時間を計りながら何度も吹込みをし、この夜も午前二時に就眠。

十月二十九日、丸山先生を囲む会の日である。主人は役所の休暇をとった。朝から全国の各新聞社、テレビ局から電話が鳴り続ける。新聞記者が出入りし応対にこ舞い。主人も質問に答える為に身動きならぬ有様。門扉に「森永ミルク中毒のこどもを守る会」の看板を打つ。会場の整備。午後四時主人と受付係の大西文子

氏と三人で打ち合わせ。四時半頃より全国のテレビ局からカメラや道具を持ち込み機械をセットする。定刻、岡山県の守る会会員の吉房、岩月、浅野、南、藤沢、白川、山本、国府各氏をはじめ福井、大阪、神戸、姫路から被害者達が子供の手を引いて次々集まれ、忽ち我が家の玄関は履物で埋もれ、靴は玄関前の石畳の上を門の方へ行列を作った。

神戸の坂本秋澄氏夫人は、都ちゃんをおんぶしおしめ袋を下げ、「今日この日が来るのを待ち望んでいました。一生懸命、都を連れ馳せ参じました。丸山先生を囲む会を催して下さいました事を感謝します。」とあえぎながら云われる必死の表情と、麻痺した都ちゃんのいたいけなさは、砒素ミルクによる十四年間の親子の苦悩を物語っていた。私は都ちゃんを早速毛布でくるんだ。色白で美しい目鼻立ちの都ちゃんが細く動かぬ手をにぎり居並ぶ人々に「森永砒素ミルク中毒後遺症の無惨な私をよく見て下さい」と無言の訴えをしていた姿に胸がうずいた。居並ぶ親も子も皆思いつめた表情であった。定刻、大塚先生、保健婦さん方、岡大衛生青山助教授、太田講師の方々、同仁病院長遠迫克美先生、簡野岡山県衛生部長等々メンバーが揃い都ちゃんを中心に七十人程が丸山先生を囲んだ。定刻に遅れたマスコミの方々は会場に入らず、裏木戸より入り堀の上に登り庭越しに取材したり撮影するありさまであった。私は、会場の入口が人でギッシリ詰まり中へ入れず折角用意した数十人分の湯茶も会場に運べず、会場から洩れる訴えの声、すすり泣く声、怒りの声をかすかに聞きながら入れ代り訪れるマスコミの方の応対と、しきりに鳴る電話で走り廻っていた。囲む会が一段落すると各新聞記者は本社へ記事を送るのに電話の順番を待っていた。娘と息子は電話番となつてそれをさばくの懸念だった。

世を恨みつつ、半ばあきらめていた被害児の親達は、丸山先生を囲む会を、暗闇に光を得た思いで受け止め、その興奮感動をNHK

テレビを初め各テレビは生放送した。囲む会が終ると同時に主人や南氏、吉房氏、坂本氏、新江氏はNHK八時半の「時の動き」に出席、全被害者の救済と守る会への結集を呼びかけた。茶の間では、囲む会に出席された大阪の保健婦さんや会員二十人程が帰宅の列車をおくらせてテレビの画面を喰い入るように見ていた。

夜十時頃「時の動き」に出演した一行が帰宅。慌しい一日を休む暇なく、明三十日岡山で行われる第二十七回日本公衆衛生学会で守る会の私達はどのように対処するか会議を開いた。兎に角皆疲れ切っているから、すぐ寝られるように私はありったけの布団を引張り出して寝間の用意をしていた。ふと見ると座敷の片隅に毎日新聞の佐竹記者が一人ポツンと座っている。夜更の午前一時頃である。

「もう特ダネは無いのに何故おられるのですか？」と問うと彼は、決意したように「守る会の皆さんの真剣な様子を見て云わざるを得なくなった。明日の公衆衛生学会には、丸山博士の後遺症ありという報告に対抗してそれを打ち消しに、阪大の西沢博士が後遺症無しの発表をしに来るんですよ。西沢義人には森永がついている。丸山報告も手放して喜んでいては危い。」と云って帰った。

さあ大変だ。しいた布団をまた片付けて、明日の学会にどう動かを協議した。夜更けて疲れ果て良い考えも出て来ない。主人は皆に宣言した。「森永の御用医者西沢義人のお陰でどれだけ多くの子供達が苦しんだ事か……。この際守る会の私達が立ち上って何としても丸山博士の後遺症ありの報告を成功させねばならない。明日は私達の子供を救うか、再び闇に葬るかの守る会の天下分目の戦いである。敵の陣営には、大森永の金と権力で動く医者が多数いる。この際、今までの調子で岡崎さん宜敷く頼むの気持ちでは絶対勝てない。甘い考えは一切捨て自分達はこれから子供を救う為にどう闘ってゆくか、一人一人が捨身の覚悟をしてほしい。丸山報告の後遺症ありと西沢義人の後遺症無しとの対決である。丸山報告を生かすも殺

すも守る会の力次第である『お願いします』ではこれからの闘いに勝てませんぞ。』

主人の真剣な言葉に皆深刻な表情でうなづき意を決した。「その通りだ。体当りで行こう。プラカードを作って学会へ乗り込み西沢を阻止するのだ。早速作ろう。」午前二時過ぎ墨をすり、皆で考えに考えた。

『阪大西沢教授よ!! 再び森永の手先になるのか!! 森永ミルク中毒被害者一同』南先生の墨痕鮮やかなプラカードが出来上がった。明日の学会で丸山報告を裏付ける臨床検査データの報告(四十二年水島協同病院で守る会が行った検診結果)を遠迫先生がされる。守る会は朝七時に出発して学会関係者や西沢派にプラカードを見せる。南氏は学会に出て訴える。等、打ち合わせして三時過ぎ、岩月、吉房、浅野、藤沢、大阪の新江氏等はさこ寝の床に就いた。南氏だけは夜中に日生まで帰った。

十月三十日、主人は休暇をとる。三時間程寝ただけであった。六時起床、会員は、西沢氏に抗議するプラカードを持って公衆衛生学会の行なわれるカバヤ会館に勇んで出発した。

私は昨日の会場や皆の寝具の整理に懸命だった。マスクミの捨てたファイルの殻や煙草の消しガラ、メモ用紙の捨てたもの等バケツ一杯になった。

午後プラカード組の岩月、吉房、浅野の各氏は疲れも見せず帰宅するなり「奥さん。大成功でした。」と会場の様子を報告した。私は、嬉しくて御苦労様と云うなり目頭を押えた。学会で南氏が小百合ちゃんと共に涙ながらに訴えた事や、守る会の悲願のプラカードは、関係者やマスクミの眼と心を捉え、学会は森永ミルク事件に関心が集中し、この日夕刊に、テレビに、事件と守る会の活動が大々的に報道された。その夜疲れ切って帰宅した主人を週刊朝日記者等が待ち受けていた。私は健康に良くないから今日は会見を止めるよ

うすすめたが、主人は疲れもいとわず丁寧にインタビューした。そして私に云った。

「今後守る会の活動は、世論の支持を得るもので貫かれねばならない。今マスクミの方々は、被害者に対する同情と、社会悪、企業悪にめぐめて彼等自身も社会正義の為に立ち上がるうとしていて。この事件と守る会を正しく理解してもらい、守る会の活動を世論が支えてくれるように、協力して下さるマスクミの方々に対しては、どんなに苦しくても親切に應對しなければならぬ。」と――。私は、その後も守る会全国本部事務所として全国のマスクミの出入りの応対をする立場となったが、常に感謝の気持ちを持って接した。茶菓子のもてなしを心がけ、そして多忙な主人は疲れ切った時にも嫌な顔一つせず、食事をしながらの記者会見をよくしたものだ。だから森永事件担当の顔なじみの新聞記者は、主人に情報を提供して下さったり、相談に乗って下さったり、また励まして下さったりした。

三十一日、新聞は三十日の学会の模様と守る会の活動を大きく報道した。会員がプラカードを持って会場前で訴えている写真も大きくのせた。この日以来、私は買物に出ると知人から、また見知らぬ人から森永事件や守る会の事を尋ねられ、十数年の歴史を一口に説明しにくく話すのに苦労をした。主人が勤務で留守中の電話や来客はすべてメモをし、必要に応じて勤務先の役所へ取り次いだ。また全国被害者や各団体から問い合わせや訴えやらの手紙が来、夜は来信を逐一検討する。郵便配達員は、束になった手紙が郵便受に入らぬのでいつも手渡してくれ、その都度頑張って下さいと励ましてくれた。守る会本部の住所がまるで違っていても『森永ミルク中毒のことも守る会』と宛名があれば郵便物は間違いないと来た。県外や離れ島から被害者が訪れ、また死亡者の親が半日座り込んで泣きながら訴える等、私は家事が渉らず一日の予定がまるで立たなかった。金も人手も無かったからすべての文書は鉄筆で原紙にガリ切り、

騰写板で一枚一枚めくって印刷をした。主人はガリ切りでよく肩を痛めた。夜、新聞記者や電話が集中して予定の事務が出来ぬ日もあった。それで主人は役所から帰宅、夕食後一時間休息をとり、起きると再び守る会の仕事に一時二時頃まで没頭する毎日がこの日から続いた。十一月一日、夕方七時頃黒川克己氏が久方振りに来訪し、守る会のその後の様子を聞いて帰った。

十一月六日午後六時、吉房、浅野、南氏来宅、全国総会開催通知状発送準備して、更に打ち合わせ会を午前一時まで続ける。遠迫克己先生も来訪。南氏は本部に寄せられた被害者の手紙をまとめ『十四年目の書簡』を出す事に全力を傾けた。

十一月八日、夜七時北村雅俊（藤一）氏、黒川克己氏来訪。主人は、同盟解散以来、長らく疎縁であった二氏に、守る会の状況を伝え、十四年間に、二氏を守る会の顧問として名を留めていたこと、丸山報告は、子供を救う最後の機会である故、立ち上がる決意であることを伝え協力を依頼した。その後北村藤一氏は、何回となく我が家を泊り込みで往復し、今後の守る会運営を中心に総会の打ち合わせを主人と夜明けまで真剣に討議した。十一月三十日に開かれる全国総会を目標に毎日準備に追われた。スローガンは南氏が担当し私は小さな筆書きや受付の用意を担当した。

十一月三十日、守る会第一回全国総会の日、早朝より南氏、岩月氏等本部へ来られ、泊り込みで来ていた北村氏、主人等と打ち合わせをした。私は、十四年間に歴史的な活動に入る守る会第一回総会を祝し、また前途の苦難な闘いを勝ち抜く事が出来ませうよう祈りをこめて暖かい赤飯と味噌汁、玉子焼等を用意し、皆に食していただいた。我が家に入入りしていた岡大学生、有川元治君は、協力学生数人を動員してくれ、終日マイク係を引き受けてくれた。私は娘や息子と一家総動員で北村氏らと総会会場の石関町の岡山県社会福祉会館に行き、先着の吉房氏ら会員と合流、会場設営を行なった。

全国の被害者が約百五十名、協力医療陣の先生方が多数、とマスコミ各社も参加した。各地の被害者は、十四年間の苦悩と、丸山報告の喜びを語り、岡山を守る会活動に敬意を表し、今後の決意を述べた。私は、散り散りだった全国の被害者が十四年目にして一堂に集り、岡崎、北村、黒川氏ら同盟当時の幹部同志が打ち揃った一致団結の姿を目の前にして、感激で胸が一杯になり喉が熱くなった。守る会は、すでに幾日幾夜の打ち合わせを経、万全の態勢を作り上げて、この歴史的な総会に臨んだ。

総会議長を顧問・黒川克己氏がつとめ、主人が運動方針、規約改正等の重要方向を明らかにし、北村顧問が「再び同盟時代の誤りを繰り返さぬため」全国単一組織の原則を確立するために闘かうことをきめていた。

総会の初めに述べる岩月氏の挨拶で、会議の方向がきまるといので、主人が前日徹夜で書き上げた理事長挨拶状を、岩月氏は音吐朗朗とよみ上げた。それはまことに権威にあふれていた。

「全国の被害者・協力者・報導関係者のみなさん。本日はご苦勞様です。私が森永ミルク中毒のこどもを守る会理事長・岩月祝一でございます。今回大阪大学の丸山先生や『森永ヒ素ミルク中毒事後調査の会』の諸先生方のお力添えにより、森永ミルク中毒のこども達の現状について、やっと十四年目に社会の温かい眼が注がれることになりましたことを心から喜び、かつ感謝しておるものであります。

然しながら、今わずかに射しはじめた一筋のあかりも私達全国の被害者の強い団結による一糸乱れぬ運動が今後にわたって展開されない限り光はすぐに消し去られます。この灯がもし消えたなら、私達のこどもは、再び今までと同様の真暗闇の運命に永久に埋め去られてしまいます。

皆さん今は実に危急存亡のときなのです。この、全国の森永ミル

ク中毒被害者の運命の分かれ道である、今日の日に於いて私達が、全国でただ一つ被害者の組織である『森永ミルク中毒の子どもを守る会』を、実に十四年間にわたって守り続けることが出来たことを光榮に思っているわけです。

本日は、全国の皆さまと共に、

- ①この会を如何に強く大きくするか。
- ②子供達をほんとうに救うにはどういうことをこれからやるべきか。

ということを中心にして皆さんの真剣なご意見を頂戴したいと思えます。

なお、最後に、一言申し上げたいのは次のことでもあります。すなわち、

『私たちは、今日まで十四年間、森永から金を貰うために運動したのではないし、今後とも金を貰うことを目的に運動するものではない。』ということです。

私達は『森永ミルク中毒の子どもを守る会』の過去十四年間のこの伝統と実績のうえに立って、あくまでも被害者の運動の純粋性と人道性を堅く守って行くことを誓いたいと存じます。

「万一、これではお気に召さぬ方がいられますなら即刻ご退場願って結構でございます。」

私達は、『子どもを守る』という、ただ、それだけの気持ちの方々とだけ、手をつなぎ同志としての理解と愛情にもとづいてこれらの運動を展開いたしましたように。」

北村氏は、同盟壊滅の悲惨な時点から説き起こし、「再び全国協議会などという組織を作ってはならない。岡山県の人々によって掲げられた灯こそが唯一つの真のものであった。われわれは、この守る会を、自らの瞳のように愛し、守ろう」と呼びかけた。

私は受付責任者として会の資金集めにメガホンでカンパを叫び続

け、子供達と、真剣に手伝った。

第一回全国総会を契機にして、守る会は

- ①全国の被害者はこの会に結集し一致団結して要求貫徹のためにたかおう。

②人道的医療陣の協力で後遺症を究明しよう。

③完全治療・完全養護を要求して子どもを元に戻してもらおう。

④世論を動員して森永の企業責任を追求しよう。

という四つのスローガンをかけ、『森永ミルク中毒被害者救済委員会』の設立という目標に向かって、全国的な活動に入った事を各新聞、テレビがまた大きく報道したので本部に寄せられる電話、手紙類は、また一段と量を増した。マスコミの出入りも来客も更に増し、その応接に時間を取られ洗濯も夜中の十二時頃になった。手紙類も主人と手分けして読み返信を出した。寄付やカンパが送って来られ、その領収書を送る。振替口座も必要となり、主人の振替口座岡山十七番を守る会に名義変更し緊急に対処した。印刷物の発送は一家総動員であった。

十二月七日は、守る会、第一回全国理事会が開かれ、北村氏は前日から泊り込みで主人と夜明けまで話し合い、当日は夜遅くまで会議。岩月、吉房氏は帰る汽車がなく岡大の太田武夫先生が車で送るという熱のこもったものであった。そして旅費も食費も、自己負担で採算を考える者はなかった。私は、空箱をもって弁当を集めて廻ったものである。理事会や集会は殆んどが日曜返上で行われた。この年の暮れ中頃に、大阪支部結成総会が開かれたり岡山県衛生部長と話し合いをしたり、本部は昭和四十四年は大晦日夜まで来客で正月気分はなかった。

昭和四十五年の正月は、元旦から明日の理事会の用意であった。一月二日の全国理事会に吉房氏が「岡崎さん宅は、正月の用意も出来ないだろうと思って……。」と、手造りのおすしや正月の煮物を重

箱に入れて持参下さった時は、心遣いが身に沁みて嬉しかった。

NHKテレビが、「現代と闘う」の特集に森永事件を取り上げると連絡が入り、カメラマンが理事会の場面、接客に立働く私の生活、主人が作った森永ミルク事件史のスライドを通して父と娘の語り合いの場面等の撮影に応じたが、父と娘の場面は、何度も失敗でやり直しの連続で主人は「俳優の真似をするのは、守る会の闘いと同じ位大変だ」と苦笑しながらテレビカメラに追われた一日もあつた。

一月十一日守る会岡山県支部の第一回総会で今後の岡山県内の活動の取り組みを討議した。

十二日NHKテレビが『現代と闘う』を放映。二十日は厚生省の鶴淵食品衛生課長、県衛生部長等と守る会との交渉に参加した。民医連協立・協同病院を検診病院に認めよと、美作地区矢掛地区の会員が鶴淵課長に詰め寄った。企業側に通じる厚生省の役人が、被害者を前に、言葉尻をつかまれないと小声で、全く無表情な顔で責任を巧みにかわす答弁ぶりや、県の八方美人の答弁ぶりに私達は怒りを越えて愛想をつかしながら根気良く喰い下がったものだ。その後何回となく、くり返される交渉に岡山県内各地区や広島県からの参加者が増えて行ったが、重症児の親は、子供を本部に預けて行かれたものだった。その都度私は、預かった被害児達と食事をしながら親の帰りを待った。

この頃の全国本部機関紙『ひかり』は十号までは南氏と主人がガリを切り騰写版で一枚一枚とすっていた。その他のおびただしい書類もそうであったから、手指が疲れて麻痺しペンが持てなくなったりした。発送も一家総動員の作業であったし、時には私一人で宛名書き、折込み、のり付け等まる一日かかり切った事もある。近所の会員に手伝ってもらう事も時にあったが、夜更けての帰宅は統かず、歯をくいしばる辛抱をした末、学生や森永告発の方々が手伝い

に来てくださり誠に有難かった。そして『ひかり第二十号』から、森永告発の谷川正彦・能瀬英太郎氏をはじめグループの方々に発送をお願いするようになった。これが『守る会本部の事務を助ける会』のはじまりであった。又十一号より岡山市の瓜生印刷所に依頼するようになった。瓜生印刷所社長瓜生和人氏は、終始、守る会機関紙の印刷に利潤を無視して協力して下さった。その後重要書類・資料・本など、会の備品も増え、とうとう土蔵の二階を素人大工で事務所へ改造し、主人は夜々ここに立てこもり事務に専心した。近所では、岡崎宅の土蔵の二階が夜になると電灯が付き、夜中まで電話が鳴ったり人声が聞こえるから不思議に思われたそうだ。土蔵の守る会本部事務所には、会員、被害者、新聞記者、写真家、医者、支援者等さまざまな方が出入りした。

四十五年一月から、岡山協立、水島協同、下津井の各病院で第一回自主検診が開始され、私達も一月十六日病院の案内を受けて行った。協立病院では、病院をあげての検診体制をしき、医師やケースワーカーが被害者の立場に立って熱心に訴えを聞いてくれた。私たちは朝から夜までかかる精密な検診に心から感激した。

また検診の様子は、テレビや新聞にも報道された。十四年間、良いい医者様さえいられたらと叫んだ守る会の暗黒時代を思い起こし、私はその夜、協立病院の塩田理事長・水落院長・上畑先生や職員一同に、「砒素中毒の子供達を末長く見守って下さい」とお礼状を書かずにはいられなかった。

こうした守る会の自主検診に対抗して、厚生省も岡山県に依頼して官製検診を行なった。後遺症はないが親を安心させる為、というこの検診を受けた被害者は、簡単な検査で先天性とか、中毒と関係なしと云われ納得出来ないと本部に訴えて来る人が多く、私はそれ等の方々に自主、官製の違いをよく説明し、改めて協立、協同、下津井病院の自主検診を受けるよう一生懸命すすめ、再び自主検診を

受けた人は、検診が精密なこと、医師の態度が納得できたと入会する人が多数あった。

県衛生部が厚生省の委託で『岡山県粉乳砒素中毒調査委員会』を結成した時、私達は、この委員会を『後遺症無視、先天性作成委員会』だと極度の不信感をもっていったから、協力医療陣の先生方に参加してもらい強力で闘って下さるのを心から望んだ。この闘いの為に民医連の先生方、対策会議の方々が本部に集まっては何度も会議が開かれた。そして激論の末、協力医療陣から水落、松岡、遠迫、三村、村上先生が入られ、ねばり強く闘って下さった。

初めから後遺症なしを決める矢吹、大和氏等が非公開・極秘を主張し、守る会側は、公開を要求して主人をはじめ岩月氏や美作・矢掛地区の会員が何回となく会場に詰め抗議した。或時は、県側が守る会の抗議団をさける為に、会議場をこっそり移動させ、守る会側がまた追いかけて、その後を、皆の夕食の注文配達を頼んだ寿司屋が探しながら追いかけるといった始末で、その夜寿司屋は、とうとう守る会会員を見失ったと本部へ告げて帰り、守る会の抗議団は飲まず、食わずで頑張ったものだった。下津井病院の三村啓爾先生は委員会の議事録を詳細にメモしては夜遅く本部に立寄り様子を報告された。(そのメモは後に『砒素ミルクⅢ』にまとめられた)

四十七年十二月、この調査委員会の発表は、僅かに皮膚の異常だけで正常者と差なしとの非科学的、非良心的なものであった。それに対し松岡、水落、遠迫、三村各先生は『健康と生活・水島生協』新聞の森永特集号で抗議と声明を出し、相変らぬ県の被害者抹殺の姿勢に守る会は憤慨した。私も主人を中心とした抗議団の涙ぐましい努力を思い、県の姿勢にいても立っても居れず、この特集号で世論に訴える為、二百枚程を病院よりもらい番町週辺に、毎晩この新聞を配達をした。署名、カンパ運動も町内会、PTA、知人、友人、両親の同窓会、等でお願ひし老人も協力してくれた。

主人も世論の理解を得る為に各大学や団体の要請に応じ各地に行動した。岡山大学図書館に於ける第一回後遺症学術シンポジウムから始まり、岡山大学医学部公害学発表集会、岡山民医研の森永問題講演会、岡山大学森永問題研究会、東京大学五月祭、東京大学公害自主講座、名古屋医大歯学部森永問題研究会、香川大学文化祭。岡山農協の社会保障学習会、食品の安全を守る会、医学会総会、小児科学会総会、東京大学反医学学会総会、等にまた小さな集まりの機会を捉えては、講演に、訴えに行ったり各種の出版物に事件と闘いの経過を発表した。

昭和四十六年二月頃写真家滝川恵清氏、吉田一法氏等が前後して本部を訪れ、この事件を写真で訴えたいと云われ、被害者宅を紹介した。各地を廻った滝川氏は『十七年目の訪問・森永砒素ミルク中毒の子供たち』の個展を東京ニコンサロンで、また続いて大阪毎日ギャラリー、岡山市役所市民ホールの展示場で開き、大きな反響をよび後に写真集として出版した。また吉田一法氏も『エンゼルの青春』の写真集を刊行した。娘や東京の石川雅夫君も闘う被害者の一員として吉田氏の撮影取材に同行し協力した。岡山医療生協理事長の故塩田寅雄氏も岡山県境や広島島の被害児宅まで写真撮影に行かれアンデパンダン展に出品され後にパネルを本部に寄贈された。被害者の父親今井高行氏も、各地の被害者の写真を作成して本部に寄せられた。これ等の写真が各地の交渉場にその都度展示され、被害者救済の急務である事が訴えられた。

四十六年四月森永告発を結成した谷川正彦氏他多数の告発のグループは、本部を再三訪問して、主人等と闘いのあり方について話し合った。森永告発は守る会支援の強力な市民グループとして、『ひかり』発送、不売、募金、交渉参加等あらゆる面で献身的な応援と『砒素ミルク』1・2・3巻の出版を行った。私は昭和三十一年に主人の書いた『森永ミルク事件史』が再び森永告発の協力で不正義

の告発に役立つ事に感激した。田中昌人氏、北条博厚氏、山下節義氏著の『森永砒素ミルク中毒事件・京都からの報告』と共に、これ等の本のチラシを本部の玄関や扉に張り来訪者に極力宣伝しては読んでいただき、守る会の闘いの理解を求めた。

丸山報告の年、昭和四十四年に、娘は中学二年になっていた。この事件と守る会の活動を正しく素直に認識し、体力作りと勉学に励み、守る会の闘いで多忙な父親を助ける娘に成長していた。清純で多感な心がじっとしていれなかったのだ。娘は自分は幸せにも学校へ行けるが、病気で学校へも行けない多くの気の毒な被害者がいる事を、先生に友に語りまた守る会の交渉場にも出席して発言するなど理解を求める努力をしていた。昭和三十年代と違い守る会を支援する協力団体や市民組織も、日ごとに巾が広くなりつつあったから学校の中でもこの事件は話題となり四十五年七月一日岡山市立旭中学第3学年の森永中毒児調査があった。四十六年八月二十二日大安寺高校一年になった娘は例年のように守る会第三回全国総会に出席した。その時東京の被害者で高校生の石川雅夫君も岡山までやって来て参加、「私達も高校生、親に任せっきりにしないで被害者救済に被害者自身が立ち上がるう」と呼びかけ、娘達も共に活動を開始した。九月二十五日の婦人民主クラブ岡山市中央集会に娘が出席して被害者の救済を訴えた。

その頃勝山高校文化祭でこの問題を取り上げる為学生達が本部を訪れ、多忙な主人に代り娘や私が事件の歴史や被害者の現状説明に一役買った。

十月十九日、娘は大安寺高校一年生の社会研究クラブ員であったが文化祭に森永問題を取り上げる事を決意した。学校側はこれを政治色が濃い、と反対する先生もあったが、娘はそれに屈せず根気よく教員室内の理解を求め、社研クラブ員、青少年赤十字の友人や生徒会役員が応援して私宅に何回も集まり、展示資料作り、印刷等の

作業をし、十九日の文化祭には守る会の重症者のパネル写真展示、事件の経過現状や被害児の症状等を模造紙に書いたものを張り「人間らしく生きる為にこの子らに光を」のスローガンで訴えた。会場でのアンケートでも学友、教師、父兄から「早く被害児の救済を」と大きな反響を呼んだ。読売、朝日、岡山新聞の各記者が娘を励まし協力してくれた。

この文化祭を皮切りに勝山高校、関西高校、美作短大、操山高校、朝日高校、津山商業高校、就実短大等々が次々と文化祭に取り上げそのたびに学生達が、事件史や、守る会活動状況、被害児の現状を勉強しに来た。多忙な主人に代って娘が説明、私は接待に忙がしかった。

この年十一月七日、二十八日、十二月五日、二十六日と四回、岡山県森永ミルク中毒被害者の会設立準備会を開き、娘の呼びかけで荒木晃君をはじめ岡山の被害者十五人程が我が家に集まり会議を重ね、翌昭和四十七年一月九日、岡山市福祉文化会館で岡山県本部を結成した。県内の被害児や協力医療陣、森永告発、守る会会員、マスコミ等約百五十人が集まり①守る会とは十分な連絡をとりながら自主的な運動をする②軽症者が重症者を助け合う③苦しみを広く知らせる④被害者の人権を擁護する⑤機関紙を発行し親睦を深める、等を取り決め、事務局を我が家に置いた。十七歳で立ち上がり、結成された被害者の会に主人は来賓として、私は受付弁当係を引き受けて参加した。被害者の会は徳島を皮切りに岡山、倉敷、奈良、香川、京都、大阪等府県単位に結成され、この組織を拡大強化する為全国本部結成準備の全国委員会が八月十三日我が家で開かれた。八月二十日岡大医学部第一講義室で被害者の会全国本部結成総会が開かれるに至った。役員の子供達は、受験勉強に追われながら、会の結成に奔走し守る会の森永交渉に、不買に、訴訟、デモ等に参加し親の活動を側面から助けた。遠く東京や大阪等の子供達はその行動

費をアルバイトで働いて作る涙ぐましい努力であった。我が家で被害者の真剣な会合が行なわれるたびに私は茶菓を運び励ましたが、森永ミルクさえ飲まされなければ、怒りも、悲しみも、闘いも何も知らない楽しいばかりの十七歳であるのにと不憫な思いで胸が詰ったものである。

この年の九月二十四日。忘れる事が出来ぬ第十四回本部交渉の日である。八月十六日森永が因果関係を認めたと発表して一ヶ月余り大野社長が来岡するとの連絡が入った。本部は電話の鳴り通しで、てんやわんやであった。「とうとう社長が出て来た、良かった。」「本当に社長は来るのか?」「この先どうなる。」「おめでとう。」の声に對して、私は「十七年間、森永は被害者をだました。世論工作です。おめでたくはない。」と電話の相手に何回この言葉をくり返したことだろう。支援の方、会員の出入り、で本部は混雑した。支援の人に交渉場の労働会館へ写真のパネルや、垂れ幕、資料等を運んで展示作業をせよ。主人は緊急会議や文書作りで追われる。娘は電話連絡で被害者の会会員の参加を呼びかけ打ち合わせる。主人は夜中の二時頃に漸く床に就き一眠りしたかと思うと三時頃起き出し、「重要な文書を作る」とペンを走らせていた。

当日私は高齢の舅と、学生の息子を連れ出席した。守る会の活動や主人達の苦労や、企業の実態などを、家族中に知ってもらおう為であった。娘は、発熱して出席できなかった山本真智子さんの詩を涙ながらに代読訴えた。全国の守る会会員弁護団、支援グループ、被害者の会会員、マスコミ多数が場内を埋め、それらの視線は怒りにもえて、守る会幹部と向い合った森永重役陣の真中に蔽うように坐っている大野社長に注がれていた。守る会会員や被害者の涙の訴え、弁護団の追及、役員必死の交渉にもかかわらず、大野社長は因果関係も企業責任も認めなかった。それは十七年間の森永の姿そのものであった。八月十七日付の毎日新聞に「羊頭をかかげ狗肉を

売るようなもので信用できない。われわれは賠償金など目指しておらず、あくまで子供達の恒久救済の実現を期し、これから一層厳しい闘いを進めてゆく」と発表した主人の見通しに、狂いはなかったのだ。こうした森永の裏切り行為で私達は「森永には一片の誠意もない」ことを更に肝に銘じ、怒りは頂点に達した。

守る会は、国民の健康と権利を守るため森永全製品の不売に全力を注ぎ、国と森永を相手に民事訴訟にふみ切った。本部には、各地の諸団体から不売訴訟の支援に関する手紙や電話が増え、夜ともなれば支援やマスコミの方が訪れ、各地の不買運動の情況や今後の闘いのあり方について話し合いが持たれ、本部は人の出入りがますます多くなった。主人は日曜祭日は会議、交渉等の連続、平日は勤務先まで守る会の仕事が入り込み、帰宅すると待ってましたと電話が鳴り、客があり食事中に何度も席を立ったり、食事をしながらマスコミや来客に会う事も度々であった。土蔵の守る会本部事務所でも千客万来で電話をさばきながら夜中の一時二時まで事務局の仕事に追われ没頭した。刻々と変わる闘いの情勢に応じて、必要な文書は緊急を要する事が多かったから文案を練る暇もなく、いきなりガリを切りながら文章を作っていた。連日の神経の緊張と過労、落ち着いて規則正しく食事のとれない毎日、夜中の鉄筆でのガリ切りは指を痛め、肩をこらし、主人の健康が損われていくのが目に見えていた。私も同様に一切の来客の応接係、電話連絡係、事務雑役係で夜遅く朝早く鳴る電話で充分睡眠がとれない、家事も思うように配れない毎日であった。無理を続け日ごと疲れの重なる主人の体を心配していたがとうとう私の方が風邪を引いてこじらせ、肺炎になってしまい、四十七年三月協立病院に四十日程入院してしまつた。

その年の九月、主人も胃潰瘍で倒れ、協立病院に入院静養したが病室で『ひかり』の原稿を書き、パジャマのまま守る会の会議やテレビに出たり、医師の回診時に電話連絡や会合に呼び出され不在で

あったりで、少々疲れがとれたと云う程度で退院した。通院しながら頑張る闘いの毎日は、四十八年二月まで続いたが、とうとう体力の限界に達し、苦痛が激しくなった。敵しい情勢下に暇もなく入院手術をためらっていたが協立病院水落院長と寺坂副院長が「辛抱の限界です。これ以上手術を伸ばす事は出来ない。岡崎さんは守る会にとつて重要な存在だから、今手術をして早く社会復帰してもらい長く活動してもらわねばなりません。」と心からの進言で胃を三分の二切除した。主人入院不在中の本部は機能が停止したような状態であったが電話だけはよくかかり、娘が留守を守った。入院中の主人もやっと起きれるようになると病室へ電気スタンドや事務用品を運び込む始末で、約一か月で退院。しかし、ゆっくり静養する暇もなく闘いに入った。

四十八年五月三日森永告発のメンバーが私宅の庭で、『森永製品不買』の縦一米、横四米の看板を二日がかりで作った。紺地に白い字で書き抜かれた玄人顔負けの立派な不買の看板は、本部の我が家の国道添いの塀にかかげられ道行く人、ドライバーに森永の不誠実を訴えた。郵便配達人も手紙の宛名が『森永ミルク中毒の子どもを守る会本部』と書いてあれば鳥取県と書いても町名番地が全く間違っても郵便物は間違いなく『森永不買』の看板のある本部へ届いた。又行きずりの人が不買とはどう云う意味かとわざわざ質問に来る事もあった。

森永告発のグループの方々は、谷川氏を中心にデパート、スーパーマーケット、森永商品販売店に不買運動を強力に進め私達が天満屋前や市中を歩くと必ず告発の支援活動の献身的な姿が見られた。私達も家族中、バッグに不買のシールをはり、中には必ず不買チラシや不買マツチを入れ、集会の場で又友人知人に配った。郵便物には不買のシールをはり、店先で森永製品を手に入れている人を見るとお邪魔にならぬように説明をし協力を頼んだ。

四十八年の十月頃だったと思う。岡山天満屋デパートが春秋恒例の内見会を催し、地下売場は人で混雑し、明治と森永の割れビスケットが一袋百円で長蛇の列となり、一人五百円、千円と飛ぶように売っていた。娘と一緒に行って森永ビスケットの売れ行きを見た私は、今なお苦しんでいる被害児達、十八年間の会社の仕打ち、健康を損ねながら夜中まで事務をとり苦しい活動を支えて闘う主人の姿などが脳裏をかすめ見過すわけにはいかなかった。ビスケットの行列の前に立ち、客に向かって「買物のお邪魔をして申し訳けありませんが、私は森永ミルク中毒の子どもを救う為に闘っている親です。森永のビスケットはこの様に売れ会社は繁栄していますが、テレビ新聞で御存知のように十八年前森永砒素ミルクを飲んだ子は、学校に行けぬ子、病気をくり返している子。寝たきりの状態等悲惨な後遺症をかかえ今日まで苦しみ、会社は何等救おうと云う誠意を見せません。皆さんこの子等を救う為、森永に責任をとらせる為、また二度とこのような事件をなくし自分達の食品の安全を守る為、私達の守る会の森永製品不買に御協力下さい。」と一気にお願ひした。すると前の四十五六歳の主婦が『森永のことはテレビ、新聞で知っていたが話を聞くと本当に気の毒ですよ。人ごとではないから皆協力しましょう。』と云って行列をくずして下さった。

店員は緊張した様子だったがおこらなかつた。私は皆にお礼をいいう向うの売場で待っていた娘と簡単な買物をすませ帰宅したが別に天満屋から営業妨害の苦情も来なかつた。そして翌春の内見会のチラシには森永割れビスケットの宣伝は姿を消していた。私は「勇気を出して訴えてよかつた。一人一人が実践しなければ」としみじみ思った。訴訟資金カンパにも町内を一軒々々くまなく歩いた。一円玉を六円カンパ下さった方、千円札を下さった方、激励して下さい。必要で、理解を得る為延々一時間も玄関先で話をし、一日に何軒も

廻れなかった事、鼻先で冷たくあしらわれ写真集を持って行きやうとわかっていただけ、それ以後は大変協力的になって下さったこともある。

四十八年三月、徳島裁判論告求刑の日、被害者の会の会員も多数徳島に集まり、岡山からも娘達数人が行った。死亡した被害者の遺影を胸に傍聴に参加し、徳島市街を守る会会員と共にデモ行進する等大活躍の後、一行は夜本部へ帰って来た。玄関に入るや病人が出たから寝させてほしいと娘の叫び声で大急ぎで床をのべた。疲れ果て顔色の青ざめた山本真智子さんを皆で支えながら帰って来たのだ。森永告発の尾瀬医師がかけつけて手当てをして下さり、他の被害者達も疲れていたが、病気の友達の為に翌朝まで附添った。親と共に闘う被害者は皆助け合い頑張り通した。

四十八年八月二十四日は岡山県民事訴訟提訴の日であった。大阪の第一波民事訴訟に続いて岡山が第二波であった。

原告代表の赤尾健一氏、那須多加太氏らは個人の救済を目的とせず、全被害者の救済の為の恒久対策案実現の為、守る会の代表として原告に立った。岡山弁護士代表一井淳治弁護士をはじめ、各弁護士、大阪の中坊弁護士はじめ各弁護士、応援の守る会会員、被害者の会々員、支援団体が南方公園に集まって民事訴訟勝利、原告の激励集会を開いた。各代表の挨拶のあと被害者の会を代表して荒木晃君が激励の挨拶、娘が必勝祈願の花束を贈った後、スローガンをかかけてデモ行進し岡山地方裁判所へ提訴した。岡山裁判所は裁判の非公開を一方的に発表した。私は、前に岡山県の官製検診が非公開の後遺症打ち消し検診をしたのと同じ姿勢があるのを感じた。守る会では公開にするよう要請の葉書を何千枚か印刷して各府県へ発送しその直後裁判所が非公開を取り止め本部からまた全国へ要請葉書発送の中止を伝える等事務所では緊張の連続だった。私はじっとして居れず、裁判所に真実の究明と公正な審判を訴える手紙を出し

た。十一月二十八日の徳島刑事裁判の判決は、製造課長小山被告の禁固三年の実刑は当然と感じたが、工場長の無罪には全くショックであった。十八年の闘いを続けた結果が、森永企業自体は罰せられないという日本の裁判の現実とか限界をしみじみ感じた。けれど判決文には森永や行政、医学の責任が厳しく追及されていて昭和三十八年の無罪判決と無念の怒りにもえた主人の姿を思うと、十年経た今日、歴史の流れ、世の移り変りを味わいながら眺めたものだ。

その後本部の我が家には、全国に拡がる強力な不買運動、現地交渉の様子が次々と伝えられた。主人は救済対策委員会の結成に三者会談に、文書作りに、機関紙『ひかり』の編集にと、勤務先の社会福祉協議会事務局次長の業務をさばきながら体を酷使用する毎日であった。

この頃、社協の役員から主人の守る会活動に対するしめつけがある手、この手で加えられた。それは守る会全国本部事務長という立場で、会を代表してテレビ、新聞、ラジオ等に出なければならなかったから、世の常という「出る杭はたたかれる」とか、ねたみ、そねみの類からの圧力であったのだろう。或る時は、民生委員を通じて留守宅の私に、主人が守る会の活動から手を引けば局長に迎える等と云って来た。又反面理解ある有識層から被害者救済の活動こそ生きた社会福祉の事業だから頑張れと激励を受けた。また見ず知らずの人から子供をだしにして金目当ての気狂いになっている、等と心ない批判や電話に唇をかんだが、私はそれ等の人に「私達は昭和三十年から闘い続けている。苦しむ被害者がいる限り守る会の活動は続くでしょう。」と答えた。

主人はあらゆる妨害と闘いながら社協の勤務を果し恒久対策案実現の為ひかり協会設立に全力を傾けていた。守る会に専従者が必要となり、主人が森永ミルク中毒の子どもを守る会事務局長として専従するよう要請を受けている事を聞いた。私は出来得るならば長年

誠実に勤務した社協の仕事も両立して守る会の活動を続けて欲しいと願ったが主人は、「社協には自分の後を引き継ぐ人材が居る。守る会事務局長は誰れでも出来る仕事ではない。過去の歴史と共に今日まで闘い抜いた者でなければ今後の正しい活動は望めない。救済事業に入る今後こそ守る会の組織が一層重要なのだ。両立は健康が保てない。被害者救済をめざした守る会の活動こそ社会福祉向上の事業だ。」といった。十九年間守る会を守り続けて来た主人の、金銭や面目から超越した当然の決意である事がよく分かったので二度と無理は頼まなかった。

情勢の進展と共に守る会全国本部事務局を私宅の間借り状態から本格的に独立した事務所にするため守る会は、貸事務所をさがしていたが、色々な条件が満たされる様な事務所が仲々見当たらないという事を聞いた。

私は偶然空家になっていた平和町の母の持家を仮事務所にとどうだろうかと提案した。そこは昭和三十年森永ミルク事件発生当時主人が被災者同盟結成ののろしをあげ同盟事務所を置いて闘った思い出の地である。その頃事務所探しに奔走されていた黒川克己氏も地の利と駐車場の便と由緒を買って事務所を移転する事に決定した。

娘ゆり子は、高校三年生となり大学をめざして受験勉強に取り組んでいた。私は昭和三十年砒素ミルクをのませて脳の後遺症に恐れおののいていた娘が国立大学に進学するまでに努力してくれた事を心から感謝した。その春娘から主人と私に宛て、十枚以上の長い長い手紙をもらった。「私達森永砒素ミルクの被害者に救済の手がさしのべられる様になったのも、世間の白い目で見られる中を闘かって下さった、パパやママの長い努力の賜です。他の被害者が認識してなくても私が一番よく知っています。何かある毎に父母の努力を考えて来ました。本当に有難うございました。これからは無理をしないで長生きして下さい。」娘から初めてもらった長い手紙を主人

と読みながら、優しい気持ちに身がしみ、嬉しくて泣いたものであった。

昭和四十九年四月二十七日財団法人ひかり協会が設立され、大阪地裁の訴訟では「国と森永が全面謝罪」と各新聞のトップに大きく報道された。この時はじめて身内から、知人、友人から「おめでとう。よく頑張りましたね。」と祝電や手紙を受けたが、やっとここまで来たけれど後遺症はもう治らぬという複雑な気持ちだった。

平和町に守る会全国本部とひかり協会の事務所が出来、番町の事務所から移転作業が始まり、電話連絡等がほぼ完全に平和町に通じるまでに約半年かかった。電話や人の出入りから解放され、我が家らしくなった。静かな昔の土蔵にかえった元の全国本部事務所の天井や壁を見る時、闘いたけなわの頃に張られた不買のチラシやシール、機関紙が当時を語りかけ思い出させる。今は守る会の活動記録や参考資料、関係図書が大切に保管されている。

丸山報告までの守る会は、岡山の少数の会員が寄り添い、世間の子供をだしにして金目当てとか、物好き等と白い目で見られる中何も報われぬ空しい活動を繰り返したが、あきらめなかった。誰一人協力者のない中で会員同志が信頼し助け合ってきた。今日まで一貫して闘った親は、金は目的としない、この手で毒ミルクを飲ませた、その親の責任を果す為に闘うのだ、という純粋な気持ちで我が子と共に多くの苦しんでいる子も共々に救われたいと会を守り続けて来た。活動の中で組織の団結なしに子供は救われたいという組織活動の重要性を身をもって知って行った。守る会結成当時からの会の方針に従い、会社と交渉しながら適切な治療に専心した会員の子供達は、当時明日の命も知れなかった重症者が現在一人前に自立している。当時の守る会の努力は、二十年後の子供の体に親の努力の結晶となって報われている。

この厳粛な事実を顧るとき、全国の多くの親達が早くから守る会

に結集し、幼児期の治療活動に加わっていたら、どれだけ多くの子供達が救われていただろうか、と、ただただ残念に思う。

こうした守る会の活動のともし火が、丸山報告を支え、全国被害者に呼びかける、炎となり中心となって組織を拡大し激しい活動を続けた原動力である。全会員の要求を討論しまとめて恒久的救済対策案を作り、その実現のためにひかり協会を設立し、救済事業が進められるようになった事は、守る会の成果であり、私達の誇りだと思ふ。

私は丸山報告までの空しい活動に、時々疑問を感じ弱音を吐いたり、丸山報告以後の全国本部事務局の家事も渉らぬ多忙と無理押しで、主人と交代で入院し、体が辛くて涙の出る事もあったが、今思えば、よくここまで体が続いたものだと思う。家中が一心不乱であった。

それは、主人が二十年間一貫して、守る会全国本部事務局長という、目立たぬ縁の下の力持ちの立場で、口さがない世間の噂や、体力の危機にも、活動の前途の暗い折にも、一回としてその立場を「止める」という弱音を吐かず、「自分の子が、たとえ良からうと砒素ミルク中毒の後遺症で苦しむ子が居る限り闘わねばならぬ。正しい事が通り、弱い者が救われる世の中にならねばならぬ。」と貫き通した主人の理想と信念の正しさと、森永事件への執念の強さに引きずられて夢中になってついて来たように思う。

ひかり協会設立以後、主人は守る会全国本部事務局長として協会理事として、他の役員方共々被害者救済の為休日返上の会議を重ね守る会の組織活動、協会の事業運営に取り組んでいる。

太陽の会（被害者の会）・支援グループ・守る会の協力でわかば教室が開かれ、重症被害者の自立教育をめざし子供達が喜んで通いその親達が教室の運営に努力している。又協会設立後間もなく、被害者の救済センターの将来構想を立て自立作業地を探し求めていた

が、瓜生和人氏が機関紙「ひかり」の印刷で主人の所へ何百回と通われるうちにその意を汲んで奔走して下さり、地元の鈴木年平氏の協力で岡山市栢谷に土地を借りることができた。そこは山あり谷あり、滝、川、畑に恵まれた大自然の中で、太陽の村はいま建設の段階に入った。

五十一年の五月の、太陽の会主催の全国交流合宿は娘が実行委員長となり、栢谷の苦田温泉と太陽の村で行なった。たとえ自分はいくても、同じ砒素ミルクを飲んで苦しんでいる友達を見捨ててはいけないと、幼い時から守る会の活動を手伝い、被害者の会の役員として頑張ってきた。私も偶然にも守る会の二十周年に岡山北支部長に選任され、微力ながら支部活動に参加している。

成人した娘は、主人の活動の一番良き理解者となり協力者となった。父親の森永ミルク中毒の子どもを守る会にかけた二十年の努力や生き方と、今後の守る会運営と被害者救済事業に骨を埋める覚悟で黙々と闘っている姿を見て、自分も将来進むべき道や生き方を見付けようと努力している。

私の二十年は、森永砒素ミルク事件で始まり森永ミルク中毒の子どもを守る会の主人を中心にした闘いで過ぎた。私達の一生は、砒素ミルクとの闘いで終るだろう。

最後に、今日まで守る会をご支援下さいました全国の無数の方々二十年間一貫して主人を支え共に活動して下さいました会員の方々、親を助けようと涙ぐましい協力をして下さった被害者の会の方々に心から感謝致します。